



統計から社会の実情を読み取る

第77回 女性がもつ対応力について

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。財団法人国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>) を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は、「統計データはおもしろい!」(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)等。ダイヤモンド社のダイヤモンド・オンラインにWebコラム「本川裕の社会実情データ・エッセイ」を連載中(隔週)。



年齢で変る女性の好む野菜

女性がますます活躍する社会になってきているが、それは女性が社会で活躍するための障害が取り除かれてきたからというよりは、むしろ時代の変化が激しい現代においては、女性の方が社会への対応力が勝ってきているからではないかとう点についてふれてみよう。

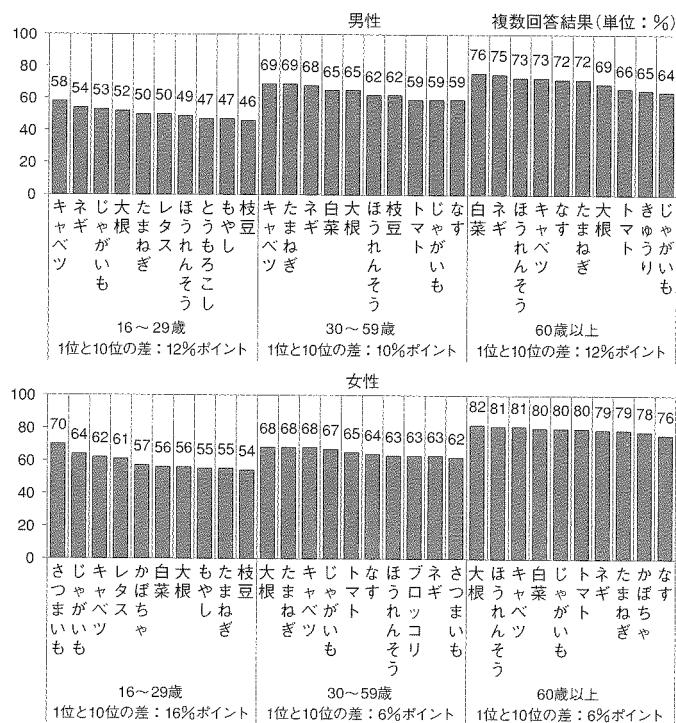
女性の対応力という点で、まず紹介したいのは女性における野菜の好みの世代差である。

図1は、NHKの調査にもとづき、男女・年齢別の好きな野菜ベスト10をあらわしたグラフである。

1位と10位のポイント差が大きいほど好き嫌いが大きいことを示していると考えられる。好き嫌いが最も大きいのは女性の若年層の16%ポイントである。男性はどの年齢層も10~12%だが、女性の場合は若

年層の16%ポイントから中年層の6%ポイントへと急に好き嫌いがなくなる点が目立つ

図1 日本人の好きな野菜(男女・年齢別ベスト10)



(資料) NHK放送文化研究所世論調査部「日本人の好きなもの」2008年(2007年調査)

る。品目的にも、全般的にキャベツ、大根、たまねぎなどの人気が高いのに対して、女性の若年層だけ、さつまいもがトップとなるなどの特異性が目立っている。

女性の場合、独身時代の自分本位のわがまま好き嫌いが、有配偶年齢に到達すると子どものため家族のための料理材料としての野菜評価へと、一気に転換するといってよいだろう。「君子豹変す」になぞらえると、まさに「女子豹変す」なのである。男性の場合、好きな野菜が年齢によって余り変わらないのとは根本的に異なるパターンといってよい（ちなみに男性はネギ好きが目立っている）。

女性より男性が大きく上回る自殺者数

社会への不適応が自殺の大きな要因であることは異論が少なかろう。こうした観点に立つと、男性の自殺者数が女性を大きく上回っているのは、女性の方が社会への適応力が高いからと見

なすことが可能であろう。

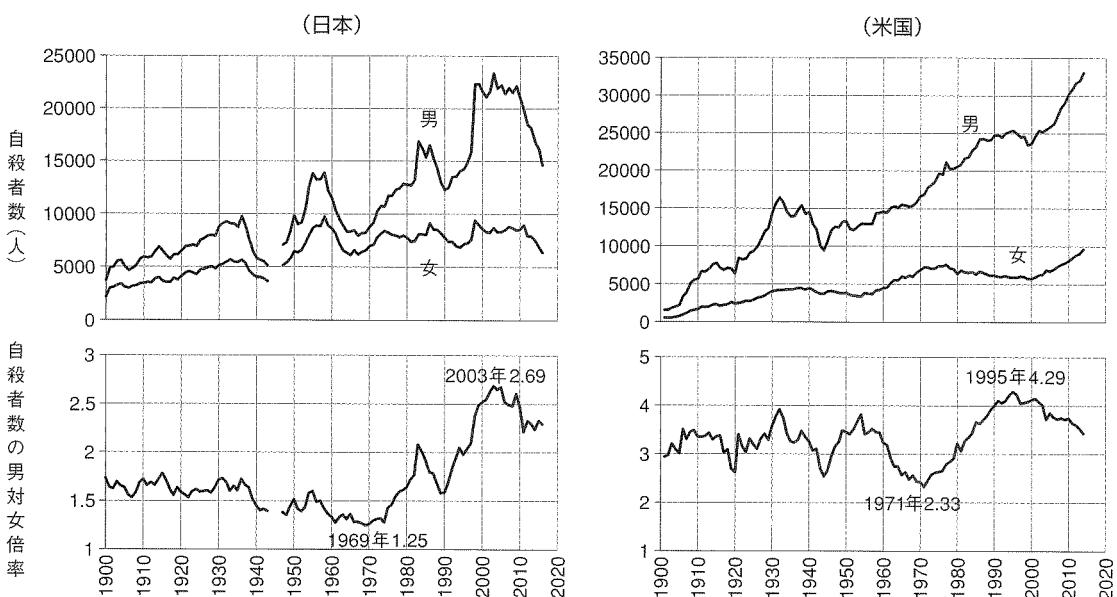
図2は日本と米国の男女別自殺者数について1900年以降の動きを示したものであるが、一貫して男性が女性を上回っている点が、まず、印象的である。これはここで示した日米に限らずいずれの国でも共通の現象である。

男女比の推移を日本について見てみると、二つの変化が目立っている。

第1に、1969年まで低下傾向にあった男対女倍率が、それ以降急速に上昇した点である。女性の自殺者数はほぼ横ばいで安定しているのに対して、男性の自殺者は急増したのである。これは、高度成長期をすぎて、女性と比べ男性の時代への不適応がますます目立つようになってきたことを意味している。

第2に、1969年までは大きな変動がなかった男女比について、1969年以降、変動が激しくなっており、女性に比して男性が経済変動に左右されやすくなっていると見られる点で

図2 男女別の自殺者数推移



注) 男対女倍率についてはボトム年とピーク年を表示。日本以外の2001年以降データはOECDによる。

資料) 厚生労働省「人口動態統計」「人口動態統計特殊報告」、OECD.Stat 2017.10.18

ある。具体的には、男性の自殺者数が円高不況で急増し、バブル経済で急減しバブルがはじけて急増するという経緯をたどったのに対し、女性はほとんどこうした景気には左右されなかったのである。

米国については、男女の自殺者数の乖離が日本よりずっと大きい点は別にして、男女比の動きに着目すると、第1点目は日本と共通であり、第2点目は異なっている。景気変動との関連では、米国の場合、戦前1930年代の大不況における自殺の急増や戦時期における急減が女性より男性の自殺者数において目立っていたのに對して、戦後は経済情勢による変動は男女とも小さくなっている。

第1点目の長期傾向については、工業化社会における男性優位と脱工業化社会における女性優位という世界的な時代変化をあらわしていると思われる。この点については、本連載の第13回「男ばかりがなぜ自殺するようになったのか」(2012年8月号)でふれたので参考され

たい。

なお、米国でも1995年以降は男女の乖離は狭まりつつある。これは、男女平等や社会への男女共同参画の流れが強まり、女性も大きなストレスにさらされるようになってきたためと思われる。日本の最近の男女比低下の動きは、バブルがはじけたことによる自殺の急増からの復帰の域を越えて、米国と同様の流れの兆しがあらわれているといえないのでなかろう。

自分をおし通すべきか

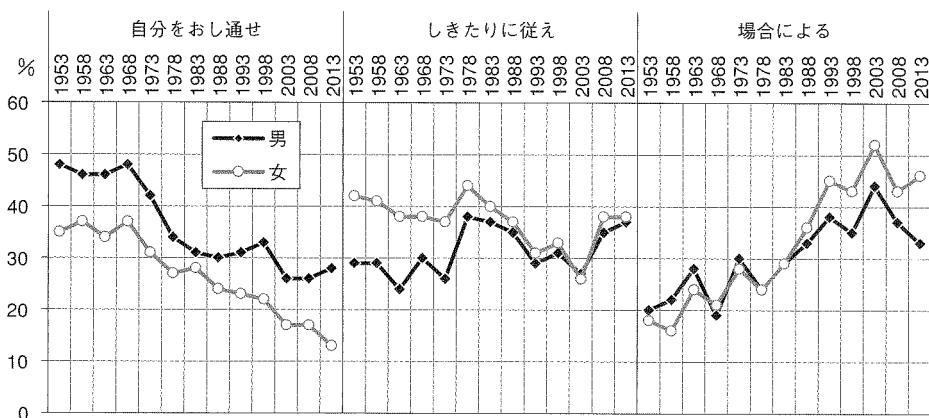
最後に、長期にわたる意識調査の結果から、対応力の男女差について見てみよう。

文部科学省管掌の統計数理研究所が1953年から5年おきに行っている「日本人の国民性調査」は、同じ設問で長いスパンの日本人の意識変化をたどれる貴重な意識調査である。

この調査の中に、「しきたりに従う」ことの是非の意識を調べる設問がある。もともとは近代的な個人主義の意識がどの程度日本人にも普

図3 状況対応能力は女性優位に

あなたは、自分が正しいと思えば世のしきたりに反しても、それをおし通すべきだと思いますか、それとも世間のしきたりに、従った方がまちがいないと思いますか？



注) 回答選択肢には上の三つの中「その他」「分からぬ」があるので足して100にならない。

資料) 統計数理研究所「日本人の国民性調査」

及してきているかを確かめる設問だったと考えられるが、1950～60年代には多かった、正しいと思えば「自分をおし通せ」という意見が、だんだんと少なくなり、代わって、「しきたりに従え」あるいは「場合による」という意見が、だんだんと多くなってくるという長期的傾向が認められる（図3）。

こうした傾向は、日本人の保守化傾向を示すデータと見なされる場合が多い。確かに、近代的な個人主義が先進的な意識だとすれば、そういう判断も可能であろう。

しかし、保守化を示しているのではなく、経済発展により自信を深めた日本人が欧米的価値観の影響を脱し、個人の主張となるべくなら差し控えるという本来の国民性に回帰したという捉え方も成り立つ。

もっとも、保守化にせよ、本来の国民性への回帰にせよ、21世紀になっても同じ傾向がさらに深まっているのはやや解せない。むしろ、「自分をおし通せ」という考え方は、時代の変化が早く価値観の変化も急な現代にあっては、状況不適応を引き起こす時代遅れの考え方となっており、「場合による」という柔軟な考え方の方が状況対応能力の高さを示しているので、選択する者が増えたと捉えた方が合理的である。

こうした見方で、男女の違いを図から読み取ると、「自分をおし通せ」は、継続的な減少傾

向の中で常に男性が女性を上回っている点が目立っている。「自分をおし通せ」は、かつては時代をリードする男性優位の考え方だったのに対しても、今や、こだわりが邪魔して時代の変化についていけない男性劣位の意識に転化したといってよいのではなかろうか。

男性の場合は、「自分をおし通せ」が少なくなった分、消極的な判断基準ともいべき「しきたりに従え」が増えている。「しがらみ」に囚われた男性社会を女性が先頭に立って批判するという、最近の東京都知事選などに見られた政治対立の構図も故なしとはいえない。

これに対し、女性の場合は「しきたりに従え」はむしろ減り、「場合による」が男性を大きく上回って増えている。柔軟で積極的な判断基準の女性優位、あるいは状況対応能力の点における女性優位があらわになりつつあるのである。

まとめ

以上をまとめると、女性は、仕事、結婚、子育て、介護、老後といったライフコースの中で、状況に応じて、みずからの考え方や感じ方の柔軟な転換を図ることが男性よりもともと得意だったので、変化の激しい現代においては男性より社会への対応力が勝ってきており、その結果として各分野での女性の活躍が目立つようになっているといえよう。